

第37回

令和4年度

八雲をよむ

感想文・詩
入賞作品集



文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とした様々な事業を行っています。

昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ」感想文・詩の募集事業も今年で三十七回目となりました。今回は、感想文四十五編、詩二十八編、合計七十三編の力作をお寄せいただきました。

作品集には、応募作品のうち優秀賞、優良賞及び佳作を受賞した十三編の作品を掲載しています。多くの皆様がこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと考えています。

結びに、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

令和五年三月

共催
後援

松江市・松江市教育委員会・八雲会

新宿区・熊本市・焼津市・山陰中央新報社・朝日新聞松江総局
毎日新聞松江支局・読売新聞松江支局・産経新聞社

中国新聞社・新日本海新聞社・島根日日新聞社

共同通信社松江支局・時事通信社松江支局・NHK松江放送局

TSKさんいん中央テレビ・BSS山陰放送・日本海テレビ

エフエム山陰・山陰ケーブルビジョン・小泉八雲記念館

目次

第37回 感想文 入賞者

★小学生の部

〔優秀賞〕

読み手を引きこませる文章の力

―『耳なし芳一』より―

富山県中新川郡立山町

水野 光理……………

1

〔日本の面影〕を読んで

中国上海市

魚山 紗愛……………

2

講評……………

3

★中学生の部

〔優秀賞〕

「耳あり芳一」に見る

東京都文京区

佐野 帆南……………

3

〔優良賞〕

伝えることの大切さ

東京都文京区

岡崎 明音……………

5

講評……………

6

★高校生の部

〔優秀賞〕

小泉八雲の旅

〔日本の面影を読んで〕

島根県隠岐郡海士町

魚山 航希……………

7

〔佳作〕

「雪女」を読んで

京都府京都市

田邊 ののか……………

8

〔読書〕を後世へ

〔小泉八雲氏の志を引き継ぐ〕

山口県下松市

岩本 リカ……………

10

講評……………12

★一般の部

〔優秀賞〕

「衝立の乙女」を読んで

〔名づけることの意味〕

神奈川県川崎市

松澤 美奈子……………

12

〔優良賞〕

ちんちん小袴

静岡県静岡市

山梨 由美子……………

14

〔佳作〕

人の世の美しさと哀しさ

―小泉八雲作「青柳ものがたり」を読んで―

広島県尾道市

榎 勝博……………

17

講評……………

16

第34回 詩 入賞者

〔優秀賞〕

ゴプリンたち

沖縄県那覇市

あさとよしや……………

18

〔優良賞〕

わたしのこと

埼玉県さいたま市

くるみ……………

19

〔佳作〕

不揃いのティーカップ

島根県大田市

山形 淑華……………

20

講評……………

20

感想文

小学生の部

〈優秀賞〉

読み手を引きこませる文章の力

— 『耳なし芳一』 より —

富山県中新川郡立山町 水野光理

ぼくが耳なし芳一の話に出会ったのは、小学五年生の五月でした。ぼくの学校では毎週水曜日の朝10分間、ボランティアの人による読み聞かせがあります。その時にあるボランティアの方が耳なし芳一の絵本を読んでもくださいました。ぼくのクラスはいつもさわがしくて、話をうまく聞けません。ところが耳なし芳一の話の時はちがいました。読みはじめてからすぐに教室がシーンとなりました。いつももうるさい友達も話に入りこんでいました。ぼくは、とても不思議に思いました。

ぼくは耳なし芳一の話をもっと詳しく知りたくなり、インターネットで絵本を買ってもらいました。その絵本をじっくり読むと、クラスが物語に入りこんだ理由が自分なりに分かりました。その理由は、作者、小泉八雲の文章の力がすごいということです。

まずぼくがすごいと思ったところは、芳一が平家物語をゆうれいの前で初めてひいた場面です。二位の尼が幼い天皇をだいて海に飛びこむくぐりを演奏した時にゆうれいたちは暴れるように悲しんでいました。芳一は目が見えないので音だけで想像しています。ほかたちも文だけで状況を思い浮かべています。ゆうれいたちの想いがすさまじいので芳一はくつきりと周りの様子を想像できていました。ぼくたちも同じように文の力によって思い浮かべることができ、物語に入りこむことができたのだと思います。これが一つ目のすごいところです。

二つ目にすごいと思ったところは、芳一が安徳天皇の墓の前で演奏しているところを、他のお坊さんたちに発見された場面です。お坊さんたちが演奏をやめさせようとした時に芳一は、「失礼だ。」と言って怒りました。これを聞いてお坊さんたちは笑いました。ここには、目が見えない芳一と、目が見えるお坊さんたちとの違いが際立っています。

三つ目は芳一の耳がちぎられるところです。八雲は血の表現に工夫をしています。まず、耳をちぎられた直後、血が流れたとは書かずに「頭の両側から生あたたかいものが垂れ落ちた。」と書いています。更に和尚さんが帰って来たとき「べとべととしている物に足をすべらせた。」と書いてあります。そして恐怖の叫びを上げて提灯の明かりで照らして初めて血と分かります。血と分かったところを後に出すことによって恐怖感が上がりました。

これらのように耳なし芳一という作品には、読み手を物語に引き

こませる作者小泉八雲の文章の力のすごさが表れています。だからこそこの作品は昔から現代まで読みつがれているのだと思います。

〈優秀賞〉

「日本の面影」を読んで

中国上海市 魚山紗愛

昨年の今ごろ、兄と父が日本の島根県に行った時に「小泉八雲記念館」という所を見学しました。私は兄が帰ってきたパンフレットを見て、どんな人なのか兄に聞いてみました。外国人なのに日本語で物語を作るなんて小泉八雲はすごい人だと思いました。それから、八雲について興味を持ち、「日本の面影」という本を読みました。

この本を読んで、小泉八雲という外国人が日本という別の国で色々な経験をしたこと、八雲が日本の文化をととても大切にしていたことを知りました。また相手の立場に立って理解する大切さを学びました。そして八雲を知れば知るほど、小泉八雲と私の体験は少し似ているのかなと感じました。

小泉八雲は「怪談」などを書いた有名な小説家で、十九歳の頃、自然と神秘に満ちた国柄に惹かれ日本にやってきました。そんな八雲は日本に来てから「日本人の微笑」に疑問を感じました。ある

時、八雲は子供を亡くしてしまった母親を見つめました。普通は悲しくて泣くはずなのですが、その母親は泣かないで微笑んでいました。それが「日本人の微笑」で、自分はどんなに悲しくても他人にそんな姿を見せないことが礼儀だという表現で、八雲は相手の立場に立って理解しようと思いました。私はこのエピソードを通して、自分が相手の立場に立って理解することが大切だと学びました。

それと、知らない国の文化の違いを知る大切さも大事だと学びました。私は日本人の父と中国人の母の間に生まれました。また、私は父の仕事の都合で二歳から中国に住んで、日本と異なる多くの文化と触れ合ってきました。日本では曖昧な表現や態度が多いようですが、中国では曖昧な態度ではなく、はっきりとした表現や態度が普通です。例えば、人から必要でない物を頂いた時、日本では「必要ないです」と直接断わることはしませんが、中国でははっきりと断ることが多いです。母は相手が日本人の場合、「大丈夫です」という言葉をよく使っていますが、中国人の場合、「真的不要（本当にいらぬ）」などストレートな言い方をしています。相手がどの国の人なのかによって、言い方や接し方を変えることが必要だと思いました。

世界には色々な国があり、それぞれの国には異なる文化があります。日本独自の文化の特徴を突き止めた小泉八雲はすごい人だと感じました。これから私ももっと色々な国の文化を知っていきたいです。また相手の立場に立った考え方を持っていき、日常に生かしたいです。

小学生の部は5作品の応募がありました。八雲の多彩な作品を読み、読者がそれぞれに心動かされた作品ばかりでした。優秀賞の2作品は、特長が異なりますが、どちらも素晴らしい作品でした。「読み手を引き込ませる文章の力——『耳なし芳一』より——」は、聴覚の世界に生きる芳一の状況と重ね合わせて、小泉八雲の文章力を考察している点が俊逸です。「『日本の面影』を読んで」は、国ごとの文化の違いやそれに基づく立場の違いを八雲のように受け入れ、今後の人生に生かそうとする姿勢に感心しました。八雲の作品やその生涯には、子どもたちに考えさせる何かがあります。ぜひ、たくさん子どもたちに触れてほしいと願います。

(講評者 佐藤 淳)

中学生の部

〈優秀賞〉

「耳あり芳一」に見る

東京都文京区 佐野 帆南

紅い社に青い海。まるで竜宮城のような赤間神宮は、山口県下関市にたたずんでいた。その赤間神宮の奥深くには常に琵琶の海をもはじくような音が鳴り響いている。

芳一堂、とそれは言うそうさ。夏の昼間、しかも竜宮城のような美しい社の中なのに、そこだけ冷たく湿っぽく、異世界のような空気が漂っているのは不思議だった。というより、気味が悪かった。一緒に来ていた母や妹は、何も言わなかった。早く帰りがつているのは背中から伝わってきた。

芳一堂の中にある琵琶法師は、耳がなかった。解説板を読むと、芳一は平家の怨霊に耳を引きちぎられた、と書いてある。私は眉をひそめて、その芳一堂の右にある七盛塚に入ってしまった。

夜になつたら如何にも「出そう」なそのお墓。墓石がたくさん立ち並び、その一つ一つに平家の公達の名前が刻まれる。私はそこで十秒くらい、合掌し目を瞑って赤間神宮を後にした。これが、私と芳一の出会いである。

正直、赤間神宮を訪れるまでは、小泉八雲なんて一切読む気はな

かったし、このコンクールにも出そう、だなんて一ミリも思っていなかった。それが一転、この芳一の話綴るゆえんになったのは、私が「平家物語」好きだったからだ。

その後、芳一の本を読んで、芳一が平家の怨霊たちに琵琶を聞かせていたことを知った。人々が恐れる平家の怨霊、しかし盲目の芳一は彼らが怨霊であることに気づかず、そのまま琵琶をかき鳴らす。それが一転、赤間神宮の和尚様なのだろう、彼が「お前は憑りつかれている」と芳一に指摘したとたん、芳一はガタガタ震えだし、和尚様に助けを求めるのである。彼は和尚様に全身にお経を書いてもらったが、お経は耳だけ書き忘れられていた。平家の怨霊は、芳一の耳を引きちぎり、去っていったという。だから芳一堂の芳一は耳がなかったのか、とそこで納得がいった。

夏に聞いたらさぞかし肝の冷える話であろう。耳なし芳一のお話で、平家の怨霊が芳一を探しにやってくるころは、何とも言えない怪談独特の恐怖が漂っている。

しかし、私はいかなかった。前述のとおり、平家物語が好きで、同じように平家が好きな私は芳一ではなく、平氏の怨霊に同情してしまった。耳を引きちぎられた芳一は気の毒だとは思ったが、恐ろしいと思う気になれなかったのだ。芳一の話は、私の目を通してみると、恐怖のお話から一転、哀愁の漂う切ない話に変わる。

源氏に敗れ、儂く散った平氏。きつと壇ノ浦の海に流れたとき、彼らは人々に怨霊だと恐れられたことだろう。彼らにとって当たり

前であった栄光の時代から一転、源氏に敗れ、彼らは怨霊として恐れられるまでに墮落したのである。そんな中見つけた美しい琵琶の音色は、醜く死んだ自分たちを悲しくも美しく謡っていた。平家の人々はそれを聞いて、随分救われた気分になったと思う。のけ者にされてきた自分たちを、語り継ごうとしてくれるものがいたのだから。しかし、その芳一もほかの人々と同じように自分たちを恐ろしく醜い怨霊として見るようになった。何度も何度も裏切られてきた彼らの心は傷ついたのではないだろうか。そして、芳一の耳だけを見つけ、形見にと引きちぎる。

そう思うと、どうしてもこの話を恐ろしいとは思えなくなった。私には「耳なし芳一」は見えなかった。平氏の武士が見た、「耳あり芳一」が鮮明に見えてしまったのだ。

そして、私はどうしてもそこに意図を感じてしまう。どうして、「耳なし芳一」なのか。この題名をそのままの意味でとつても良いのだろうか。私は小泉八雲にも私と同じ景色が見えていたのではないかと思う。怪談の中に込められた、美しく儂い物語。

西洋人である、小泉八雲。不幸な境遇に育った、小泉八雲。左目を失明した、小泉八雲。そんな彼がこの地、日本の怖い話や恐ろしい話に惹かれたのは、日本という土地が大切に作る儂さや美しさの魅力に触れたからなのではないだろうか。「判官びいき」という言葉があるように、日本には独特の美というものが根強く存在している。そして、小泉八雲のこの思想や平氏たちの物語が今に受け継がれてきているというそのことこそが、人々を魅了してきた日本の美

の存在を証明している。

そして私は「耳なし芳一」を読み終わったとき、この話も、小泉八雲も、判官びいきの風潮も、改めて大好きになった。美しく散る桜も、儂く道にたたずむ紅葉も美しく見えて、ひたすら淡いものに惹かれるようになった。怪談の裏に隠された、日本の、そして小泉八雲の「美」の景色。八雲もまた、それに魅了された一人だったのだろうか。少なくとも、彼が日本古来の怪談を愛していたことは言うまでもない。

彼が作り上げた「耳なし芳一」という名の琵琶法師は、今も壇ノ浦の海の前に、琵琶をはじいている。

〈優良賞〉

伝えることの大切さ

東京都文京区 岡崎 明音

地震や大雨や台風といった自然災害のニュースの中で避難というキーワードを耳にするたびに、私は絵本『津波!!命を救った稲むらの火』を思い出します。幼稚園の絵本コーナーに置いてあり、その後図書館でも借りて読んだ絵本で、私にとっては小泉八雲を知ることきっかけとなりました。東日本大地震の二、三年後のことですから、地震を体験し、テレビの報道で津波を見て、避難をすることが

いかに重要かを小さな私でも分かっていたと思います。ですから、村人全員の命が助かったというストーリーなのに恐ろしい出来事が書かれている怖い絵本というイメージで、稲むらにつけた火の赤色と津波の渦の絵も強く印象づけられました。

大切な財産である稲むらに火をつけて村人に危険を知らせて命を救おうとした長者の浜口五兵衛の立派な行動は、教訓としての作り話ではなく、実際の話をもとにしているということを読んでもらって知り、衝撃を受けたのを覚えています。当時テレビで見た津波の映像と絵本が重なったからです。またその解説で小泉八雲のラフカディオ・ハーンという名前を知りました。その時は名前を覚えられませんでした。日本名をつけるくらいに日本が好きで人であったのだろうと、小泉八雲という名前もまた強く記憶に残ったのです。

昨年避難情報に関するガイドラインが改定され、最近の自然災害を伝えるニュースでは直ちに命を守る行動をとるようにと避難を呼びかけるアナウンサーの声をよく耳にします。今年の八月上旬には東北地方と北陸地方に線状降水帯が発生して大きな被害をもたらしました。一度は公会堂に避難した後には危険を感じて、さらに高台にある別の場所に避難したことで死者や行方不明者をひとりも出さずにすんだという新潟県のある地区でのニュースを見ました。再避難を判断できたのは新潟県内で戦後最大の被害である羽越水害の教訓によるものであり、最初に避難した公会堂はその後土砂崩れに巻き込まれたというのですから、再避難を決めたことは英断です。そ

の土地の歴史を知っていたからこそ守られた命と言えるでしょう。一人の命を失うこともなく避難ができたというこのニュースを知り、大雨による水害と地震による津波という災害の違いはありますが、絵本『津波!!命を救った稲むらの火』が思い出され、久しぶりに読んでみたくなりました。

昔読んだ時は、とにかく怖い絵本で、自分の財産を投げ打って村人全員を救ったその土地の英雄の話という理解でした。しかし中学生の今改めて読み返してみると、単に村人全員の命を救った英雄の話であるだけではないと気付きました。昔その土地で起こった出来事が先祖から子孫へとしっかり伝えられていたこと、単なる昔話としてではなく教訓として子孫が覚えていたこと、そして、子孫へと伝えられていたことが生かされてたくさんの方が助けられたという事実を文章に残すことで、広く世の中に伝えた小泉八雲の偉業に気が付かされたのです。しかも小泉八雲の出身が日本でないことを思うと、有名な都市ではなく田舎での出来事を題材として文章を書くほどに日本への関心が深く、日本を愛していた人なのだろうと思われ、小泉八雲に関心がわきました。

昔から親から子へと語り継がれている話には、語り継がれるだけの理由があるはずです。その話が生まれるにあたって何か大きな出来事があったのであろうということが推測されます。その出来事が災害に関することであったとして、語り継がれた話が今も存在しているということは、被災しつつもその土地を離れずにそこで暮らした人たちがいたということの証です。語り継いだ人たちがその

土地を大切に思っていたこともわかります。語り継がれる間には、万が一の時には必ず子孫を救う助けになるという気持ちもあったのではないのでしょうか。代々語り継がれる話は、その土地を大切に思いながら生きた人たちの体験の記憶なのです。後世にしっかりと伝えていかなければならないのだと思います。

しかし語り継がれるだけでは話は少しづつ曖昧になりますし、話の広まる地域も限定的です。小泉八雲が調べて書き残して広く伝えたことはとても重要で素晴らしいことなのです。読み手が、それぞれ住む土地の歴史を正しく知り、ためらわない避難をすれば、いざというときに守られる命がたくさんあることを伝えてくれます。小泉八雲がこの絵本もとの物語である『生ける神』をこの世に出してからすでに百年以上が経ちますが、これからも多くの人に読み継がれていって欲しいと思っています。

講評

中学生の応募は五点と少なかったものの、読み応えのある感想文ばかりであった。非常に甲乙つけがたく、残念ながら入賞を逃した中にも、八雲文学から影響を受けたこと、八雲の生き方を自分なりに分析したことなどについて、巧みな筆致で描かれた素晴らしい感想文があったことを記しておきたい。

優秀賞は「耳あり芳一」という目の付け所がおもしろい。「平家物語」好きで、哀れな平氏の怨霊側から見た芳一を思い描ける

高校生の部

ところは、驚くべき感性の豊かさだ。また、優良賞は、同じ絵本でも、幼い頃と比べて読みが深まり、八雲の功績を再評価したとある。どちらも、読書の醍醐味を改めて教えてもらったような魅力的な文章だった。

(講評者 西村 勝美)

〈優秀賞〉

小泉八雲の旅行

～日本の面影を読んで～

島根県隠岐郡海士町 魚山 航 希

最近のマイブームは読書だ。冬休みの間、たくさんの本を読もうと思いつき、とりあえず自宅にある本棚を漁った。しかし、父親の難しそうな本が立ち並ぶその本棚の中には私が読みたい本を見つけることは出来なかった。するとその様子を見た父親が一冊の本を勧めてきた。見るからに読んだことのないような難しそうな本を私は受け取ったが、本の表紙に描かれていた「小泉八雲」の肖像画を見て、去年訪れた小泉八雲記念館と縁を感じ「日本の面影」という本を読むことにした。

この本は一八九四年に出版されたラフカディオ・ハーン(小泉

八雲)の代表作「知られぬ日本の面影」を現代語訳した本だ。彼は「怪談」などの名作を著した有名な小説家である。一八九〇年当時、新聞記者として来日した小泉八雲が日本の松江・出雲で体験したエピソードを来日後初めて著した作品集だ。この本は「盆踊り」「神々の首都」「キツネ」「日本の庭」などの十九個のエピソードを纏めており、それぞれのエピソードを日本の風土と関連付け、我々日本人も驚くような細かい描写が描かれていた。

私はこの本の中で印象を受けた場面が二つある。

一つ目は、彼が松江大橋を訪れた際のエピソードだ。伝説によると約四〇〇年前その土地を治めていた戦国武将が川に橋を掛けようとしていたが、洪水などの影響でなかなか完成できずにいた。するとその土地の村人が荒れ狂う洪水の霊をはずめようと、源助という男を人柱として橋脚が立つ川底に生きたまま埋めた。そして、その橋は三〇〇年の間びくりともしなかつたという。それからというものの橋の上では赤い火の玉がちらつくと言われている。私は身の回りにあるような橋でさえこのような興味深いストーリーがあると分かって驚いた。また、私はこの伝説が八雲が「怪談」を著作したきっかけになったのだと思いつき、とても印象的だった。

二つ目は、八雲が島根県の中学校の生徒と別れる場面だ。八雲は旅の最後の方で英語教師として島根県の中学校に着任した。八雲は日本語を話すことが出来ないで生徒たちのコミュニケーションが困難で苦戦していたが同じ英語教師がサポートしてくれたのもあり上手くなじめることが出来た。そして、何ヶ月か過ごしたあと日

本を離れる際の生徒達との手紙にとっても感動した。私は生徒とのコミュニケーションが英語でしかない中でここまで親密に仲良くなったことに驚いた。また、私が中学校の頃、おなじクラスにいた韓国の人と言語は違えど仲良くなったことを思い出し、とても懐かしい気持ちになった。

これらの事を通じて私は改めて八雲の日本の風土に関しての探求心に驚いた。彼は日本の神社、伝統行事、人、慣習などのあらゆることに興味や疑問を抱いており、日本の文化などをとても大事にしようとしていると思った。

また、私はこの本を通じて私自身日本の伝統的な行事や文化についてもう一度見つめ直すべきだと思った。私が住んでいる近くには神社や祭りがあったが、一欠片も興味がなかった。しかし、この本を読んでから改めてそれらの何百年受け継がれた歴史などに重要性を感じ、より深く知りたいと思うようになった。

そして、この本は私に気付きを与えてくれた。それは日本の風土が美しいという事だ。八雲が旅を通して外国の人の視点から日本を見ていたため、私の身の回りにあるものがとても繊細で美しいことを知ることが出来た。例えば、八雲は多くの日本の神社を訪れたのだが、訪れた全ての神社についてとても詳しく書かれており、その一つ一つの神社の歴史、祭神、彫刻などのあらゆるものが違い、特徴的であることが分かる。このようなことに私は今まで目を向けてこなかったのでも美しいと感じた。また、彼が旅した場所である島根県に対しての見方も変わった。高校生になった私は急遽島根

県にある高校に通うことになった。島根県は「田舎」というイメージでも何もなくそんな場所と思っており、高校生活に対しての不安も生じていった。二期が終わり、冬休みに入っても島根県の魅力が分からないでいた。しかし、本を通じて八雲が訪れていた島根県にある数々の歴史ある建造物、文化や日本神話との深い関係性を知り島根県に対する見方が一八〇度変化した。私は島根県に来たことに嬉しさを感じるようになった。

この本は私の考え方に大きな影響を及ぼしてくれた。私もこれを機に島根県や日本全国にある歴史ある建造物を調べ、多くの本を読みたいと思う。皆さんも是非この本を読んでみてくれると嬉しい。

〈佳作〉

「雪女」を読んで

京都府京都市 田邊 ののか

私は「雪女」という物語を読みました。この物語は、十八歳の巳之吉と老人の茂作が冬のある寒い日、吹雪に会い帰ることができなくなってしまうため、小屋に泊まることから始まります。眠りについてた巳之吉が目覚めると、白装束を身につけた女が現れ、茂作に息を吹きかけて凍死させてしまいました。その女は巳之吉を殺さず、

「おまえも殺そうと思ったけれど、まだ若いのだから殺すのがかわいそうになってきた。おまえを殺さないが、今夜見たことを誰にも言うな。言ったら殺す。」

と言って小屋を出ていきました。その翌年、巳之吉は「お雪」という少女と出会い、十人の子供たちと暮らしていましたが、巳之吉はある夜、十八歳の時に見た雪女の話を お雪に語ってしまいました。お雪の姿は十八歳の時に見た雪女の姿に変わり、こう言いました。

「それは私だ。一言でも話せば殺すと言った。だが、子供たちのこととを思うと殺すことはできない。子供たちにつらい目をあわせたときはお前を殺す。」

そう言ってお雪は姿を消してしまったという物語です。

私はこの物語を読んで、約束を守らなかつたら大切なものを失ってしまうということを雪女は教えてくれているのではないかと思いました。巳之吉は一年間、母親にも雪女の話をせず約束を守っているように見えました。しかし、お雪に話を促がされたときには、軽く話し始めました。話してしまったことにより、巳之吉の大切な妻であるお雪を失うことになりました。また、約束を破ったことにより、巳之吉自身の心にある信念を失ったり、自分自身を信用することができなくなったりと思います。なので、「雪女」という物語を通して小泉八雲は、約束を守ることの大切さを伝えているのではないかと思いました。約束を守ることとても大切なことだと思います。もし、私と友達との間で約束を作り、その友達が約束を守らなかつたとしたら、友達に対しての信用を無くします。日常生活

の多くを友達と過ごし、時間をかけて築いてきた信用は、約束を守らないという小さなことでもすぐに失ってしまいます。人間関係を構成していく中で、信頼を作るといことはとても大切なことです。その信頼を作るためには、約束を守ることにも繋がってくると思います。人間関係だけではありませんが、約束を守ることが私たちの生活の中でとても重要なことであることを筆者は伝えてくれているのではないかと思います。

また、私は雪女が巳之吉を殺さなかつたことを不思議に思いました。雪女が巳之吉を殺す機会は二回ありました。一回目は山小屋で、二回目は巳之吉が雪女についての話をしてしまったときです。一回目は見逃してもいいとしても、二回目は雪女との約束を破つたのに殺さず、子供を幸せにするように伝えていきました。なぜ、雪女は巳之吉を殺さなかつたのかを考えました。私の考えの一つは、雪女は巳之吉を本気で好きだつたのではないかということです。老人は殺したのに巳之吉は殺さなかつたということから、巳之吉に対して好意を抱いてしまったため、殺すことができなかったのではないかと思つたからです。一年後に巳之吉と出会い、結婚をして十人もの子供たちと過ごした日々は幸せだつたと思います。雪女であることを忘れ、一人の人間として生活することは絶対に楽しかつたはずですが、だからこそ、雪女の話の話を促したとき、巳之吉が軽く話し始めたことは雪女にとつて悲しかつたのではないかと思つた。約束を破つた巳之吉を殺したかつたはずなのに殺さなかつたのは巳之吉に対する愛情が勝つたからなのではないかと思つた。

た。また、最後に、子供たちを辛い目にあわせないようにと伝えたいのは、愛する人との子供に元気に、幸せに成長してほしいからだと思います。巴之吉を殺してしまうと、子供たちにも悲しい思いをさせてしまうと考えたのではないかと思います。子供たちも雪女にとっては大切な人たちであり、自分の愛する人たちに悲しい思いをさせたくないといった雪女の優しさが見えました。

私は「雪女」を読んで、様々な考えが浮かびました。筆者が何を伝えたいのか、登場人物はどのような思いを持っているのか、自分に想像することが出来たと思います。短い物語でも、深く読み込むことができ、とても良い勉強になりました。怪談だからただ怖い話なのではなく、教訓が書かれているように感じ、怪談に興味を持ちました。他の物語も読み、小泉八雲は何を伝えてくれているのか深く考えたいと思います。

〈佳作〉

「読書」を後世へ

小泉八雲氏の志を引き継ぐ

山口県下松市 岩 本 リ カ

幼いころから一人の時間が好きだった。決して人とのコミュニケーションが億劫だという意味ではない。むしろ得意なほうだ。ただ、本とのコミュニケーションというあまりにも深い沼に囚われてしまっただけだ。私の人生は本とともにある。幼稚園生時代。友達からの遊びの誘いを断り喧嘩して大号泣した後、先生が絵本を読んで落ち着かせてくれた。腫れた顔のことなんて忘れていた。小学生時代。中庭から聞こえてくる笑い声や叫び声を聞きながら、母に買ってもらったポケモン図鑑を熱心に読んでいた。寂しいとは一つも思わなかった。中学生時代。恋愛話で盛り上がっている人、勉強や塾の宿題をしている人。個性溢れる教室の隅で、サスペンス小説を味読していた。周りの声など入ってこなかった。そして今、高校生時代。昼食と歯磨きを済ませたら、心と足が図書室へと向かう。何百、何千冊の中から、目が合った本を読む。いつもの席で、昼休みギリギリまで。まるで学校を抜け出しているような特別な感覚が、とても心地よい。そこには、私だけの世界が存在している。手を伸ばせば本がある。そんな環境で育った私にとって、読書習慣は自然と身についている。と、思い込んでいた。「読書」とは何

か。」その答えを考えるまでは。「読んで字のごとく、『書を読む』ことだろう。」それほど読書は単純なものだと考えていたが、私が思う以上に、それは深甚な行為であった。本来の読書とは、一冊の本を何日、何か月以上もの膨大な時間をかけて、じっくりと読むことらしい。まるで研究者のようだ。文字を目で追うことは、「読書」ではなく、機械的な「作業」に過ぎないのだろう。私に身についていたのは「読書」習慣ではなく、「作業」習慣だったのかもしれない。私も「読書」をすることを心掛けて、まだ見ぬ世界を堪能したい。

あなたは過去に読んだことのある本を引っ張り出して、もう一度読み直したことはあるだろうか。もしそうならば、その本は価値のあるものらしい。では、もう一度読みたいと思われなかった本には価値がないのかというと、私はそうは思わない。価値のある本よりは劣るかもしれないが、実際に一回は読まれているからだ。需要があったからだ。価値のあるものと聞いて、ふと「人生」という重量感のある単語が思い浮かんだ。

高校に入學してから、時間の経過が異常なほど速く感じる。どうしようもないことだが、時の流れが恐ろしい。勉強をしている時間も。家族といる時間も。本を読んでいる時間も。「幸せな時間は一瞬で過ぎ去って、命が尽きる時も一瞬で来るのだ」と、ネガティブな考え方をしてしまうこともある。特に最近、将来について考えることが増えた。二年後には大人になり、自分でお金を稼いで、食べていかなければならない。責任を負わなければならない。もうす

ぐこれらのことができるようになるのだろうか。そんなことを考えるようになってから、この本と出会った。小泉八雲氏が私に語り掛けてくれているような気がした。

本は表紙を開いたら見返してから奥付まで読むのが、作者に対しての礼儀だと思っているし、途中で読むのを諦めたくなる難解な内容のものも、本への自分自身の読解力を測るための試練だと思い、読破しなかった本はない。ならば、人生も走破するために、同じように努力すればよい。人生は一番難しい「本」なのだ。挫折に直面したら前のページを振り返り、待っている楽しい出来事、嬉しい出来事は、全力で幸せをかみしめる。これが小泉八雲氏の後世に残したかった「読書」家に適する、とっておきの「本」の読み方だと思ふ。

学校にいる間、どれ程の時間を読書に費やせるのだろうか。学校内の学生の暇というものは、案外少ない。授業と授業の間の十分や昼休みくらいだ。私はその多くない自由時間の中で、文学の真髄に迫りたい。レベルの高い「読書」というものをしてみたいのだ。当書を読ませていただき、初めて本を読むという行為について熟考することができた。人々は、知識を得るため、快楽を得るため、暇をつぶすために読書をする。たった一冊の本でも、人によっては様々な使い方ができるといふ点は、本ならではの魅力だ。先ほど「読書」をしたいと述べたが、ただ活字に触れる機会として、読書をするのも有意義な時間となるだろう。

私が大人になったら、大きな「読書」家になり、もしかしたら本

一般の部

〈優秀賞〉

を生みだす側の人間になるかもしれない。どんな道を選ぶかはまだまだ分からないが、本とは一生仲良くしていくことになるだろう。読書の概念を変え、前向きに未来を考えるきっかけになった小泉八雲氏に感謝する。「読書」の価値を理解する人が増えてほしいと願う。

「衝立の乙女」を読んで

「名づけることの意味」

講評

神奈川県川崎市 松澤 美奈子

あらすじを前半に書きすぎる感想文が多く見られました。あらすじは簡潔にまとめ、本を読んで胸の内に湧いてくる想いを言葉にしてください。「小泉八雲の旅行」日本の面影を読んで「は県外から島根県の高校に通うことになった自分自身と小泉八雲の旅を重ね合わせて書いている点を高く評価しました。後半の自分の心情の変化も興味深かったです。ただ、大人が好むいかにも高校生が書きそうな感想文でもの足りない。読みたかったのは「高校生らしさ」ではなく「あなたらしさ」でした。

『雪女』を読んで「は約束への読み込みが良いと思いました、あと一步の深さが足りず残念です。

『読書』を後世へ「小泉八雲の志を引き継ぐ」は珍しい作品に挑戦したことと応募作の中で抜群の文章力が決め手になりました。

(講師者 高嶋 敏展)

「衝立の乙女」は、一九〇〇(明治三十三年)年に出版された作品集『影』に収録された話である。京都に住む若い書生、篤敬が古道具屋で手に入れた衝立。そこに描かれた美しい少女に思い焦がれるあまりついには病に伏してしまふ。そんな篤敬を救ったのは、彼が尊敬する老学者の言葉だった。「お前は、その女に名前をつけてやるのだ」「そして毎日、その絵のまえにすわって、いつもその女のことを思いつづけて、お前のつけた名前でやさしく呼んでやるのだ、女がほんとに返事をするまでな」。

篤敬は老学者の助言の通り、何日も繰り返し少女の名を呼び続けた。するとある日突然少女が返事をして衝立の中から出てくる。そして二人は「七生」の愛を誓い合って、少女は衝立に戻ることはなかったというのである。篤敬がどんな名で少女を呼んだのかは記されていない。

ハーンが日本の女性の名前について考察した文章が『影』の別章に収められている。要約すると、英語圏では、女の子には「ロー

ズ」「リリー」など、花の美しさになぞらえて名づけられることが多い。日本では当時、主流だったのは「仮名二文字」表記で、例えば「とく」は徳、「きよ」は清、つまり純粹の意味を表すなど「身体的な美しさより、はるか上に道徳的な美しさを置いている」と書いていることは、「衝立の乙女」の文中の老学者の言葉、(この衝立の姿絵を描いた菱川吉兵衛は)「その容姿ばかりでなく、こころも描いた」という表現と響き合う。ハーンが日本の文化と人々の中に見出した美点の一つであろう。篤敬が名づけて呼んだ少女の名は、容姿のみならず、魂まるごとの美、存在そのものの祝福を表す名だったに違いない。

一方でこんなことも言える。「名づけは欠落を補う心」だ。例えば戦争の最中には戦勝を願う名づけが多く行われ「勇」「勲」「功」「勝子」さんたちがたくさん誕生した半面、戦後は逆に平和を願って「和雄」「幸子」などが人気があった。名づけは時代を映す鏡であって、その時代に欠けている何かを補うように、希望を込めてつけられることが少なくない。そう考えると、ハーンが目にした「とく」「きよ」といった名づけは、ややもすると不徳がまかり通り、不浄が横行する現状に抗って生きよ、という切なる願いの反映だったかもしれない。篤敬が衝立の中の少女に呼び掛けた名前は、強く願いつつも、そう簡単に叶えられない望みが託された名前でもあったはずだ。

世界を構成するあらゆるものは何らかの名前が付いている。固有名詞だけでなく、目に見えない概念のようなものにも。しかし、世

界を構成する「もの」があるからそれの一つ一つ名前がつけられるのではなく、一続きの世界の一部分を、ある理解で切り取ることでそれを名づける必然性が生じる。言語学者のソシュールがそのようなことを述べている。つまり、今存在している「もの」は初めからあったものではなく、認識されたからこそ名前を持ったのだ。潜在の海に埋もれていた何かが顕在の陸に浮上したからなのだ。言葉にする(名づける)ことで人は存在に気付く。

篤敬が病の床から身を起こし、幸福に導かれた始まりには、本来はただ衝立に貼られた紙に描かれた姿絵に過ぎなかった少女への「名づけ」があった。衝立には姿だけでなく「こころ」が描かれていることが彼にはわかった。姿のみならず、その精神も含めてこの上ない美しさを感じ取り、それにふさわしい名前をつけて、根気よく呼び掛け続けた篤敬の、誠実な心のありようが行いが少女に人格を与え、動かし、この世にその存在を顕在化させた。そして二人はお互いに愛を誓い合って「七生」にわたる幸福を得た。強い思いが現実を作るというメッセージを私は感じる。

この短い話は次のように締めくくられる。
「日本の作者は声を大にしていう――

『この世でこんなことはめったに、起きるものではない!』

論理を越えて現実を変えような誠実な思い、信じること、愛情、さらにそれが永続すること。篤敬が少女に対して成し得た「名づけ」は、人が忘れてはならない何かを、克明に認識する営みであった。「大切なことは口に出していきましよう。そして誰かこそ

の思いを分かち合っていきましょう。こんなことはめったに起きるものではないと知りつつも。」と、ハーンが言っているような気がする。

私たちは今また混沌の世の中にあるが、幸福を願って名づけたいい思いを口に出して、世界の人々と共有していくことの大切さをハーンは教えていると感じる。そして改めて思う。篤敬は少女を何と名づけたのだろうか。

〈優良賞〉

ちんちん小袴

静岡県静岡市 山 梨 由美子

新型コロナウイルスが世界中に猛威をふるうようになってから、奇妙な姿をした伝説の生き物が一躍日本中に広まった。その姿は三本足に鱗のある体で、嘴のついた顔をした妖怪である。名前はアマビエ。コロナ禍の現在にあって誰もがその名を知ることになった。アマビエは江戸時代に肥後国に現れたと伝えられる妖怪で、「疫病が流行したら、私の姿を描いた絵を人々に早く見せなさい」と予言して海の中に帰ったと言われている。アマビエの存在が脚光を浴びてから街の至る所でその姿を描いた絵を目にするようになった。これは、今まで経験のない感染症の流行が少しでも早く収まってほし

いという日本中の人々の願いが起こした現象と言っているのだろう。

私達日本人は自分達の力の及ばないことは神がかりのこととして捉え、恭しく祀り、ご加護してくださるように拜む。目に見えないものであっても、そこには魂が宿ると考える。毎月一日と十五日には神棚に榊とお酒、米、水、塩をお供えする。神棚が家の中にあるので神社に行かなくても家内安全、商売繁盛、無病息災等を身近で祈願することができる。子供の頃、茶碗に米粒一粒でも残すと目が潰れると言われた。大人になった今ではこれは迷信だと知ってはいるが、この迷信はお米を粗末にすることを戒め、農家の方に感謝していただくことを教えている。家の中に出る蜘蛛やヤモリは家を守ってくれる生物だと考えるし、櫛や針、人形等は壊れたり不要になってもゴミとして捨てずに、神社に持って行き供養してもらおう。これは私達日本人が身の回りにあるものには付喪神が宿ると考えるからだ。目に見えるものであれば感謝して大事に扱うことを教わり、目に見えないものであっても大切にすることを教えられるのである。

「ちんちん小袴」はものぐさな若妻を懲らしめようと、小さな侍に化けた量の妖精が毎晩丑の刻に歌いながら現れる話である。

ちんちん小袴

夜も更けそうろう

お静まれ、姫君

やあ、とんとん

若妻はこの妖精を怖がったが、人間を懲らしめる手段としては何

とも滑稽ではないか。

戦から戻った主人が病の床に伏している妻から病気になった理由を聞いて寝間の押入に隠れ、襖の隙間から小人達が畳の中から出てくるのを待っていると、現れた小人達が歌って踊る様子がおかしくてふきだしそうになる。この小人達は恐ろしい姿で若妻を脅かしてなどいない。へんてこりんな格好で歌って踊り、若妻を馬鹿にして喜んでいるにすぎないのだ。若妻は自分が小人達に嗤われていることはわかっていたし、小人達が妖精ではないかと気づいていたのに、それが何の妖精で、どうして自分の前に現れるのかまでは考えが及ばなかった。何故なのだろう。自分の身に普段とは変わったことが起これば、何かの知らせかと、我が身を省みるのが普通だろう。それなのに若妻は武士の妻が妖精に怯えることを恥ずかしく思うだけで、自分を振り返ることをしなかった。それは若妻の実家がお金持ちだったから身の回りには十分な物があつて何一つ不自由することなく育ち、本来は自分でやるべきことまでも奉公人にやってもらっていたので、物には感謝して大切に使うことを教えられてこなかったからだと思う。主人は戦で不在がち、主人の両親も温厚に接してくれていたもので、嫁いでも若妻のものぐさは直らずにいた。使った爪楊枝をきちんと始末しないで畳に刺していたとは、畳の妖精が怒るのも無理のないことだ。

西洋人の八雲は日本に来て日本人が家の中では履物を脱ぎ、畳の上で眠り食事をする様子や、畳がいつも綺麗に整えられているのを見て驚き、感動したことだろう。古事記を読んで日本に魅せられた

八雲にとって物に靈魂が宿るといふ日本人の考え方は共感しやすく、八雲自身も大切にしたいことであつたと思う。八雲が来日したとき日本は鎖国時代の遅れを取り戻そうと、八雲から見れば素晴らしい日本の民俗風習がなおざりにされ、西洋文明を取り入れるのに躍起になっていた。そうした日本人の姿に少なからず失望したことだろう。西洋かぶれの日本人に今一度自国の美しい風習を忘れずにいてほしいという願いを込め、八雲は新潟県佐渡島に伝わる民話を元に「ちんちん小袴」を書いたのではないだろうか。

八雲と言えば怖い話を綴った『怪談』の作者というイメージが強かったが、「ちんちん小袴」のような愉快な話もあることを知り、知られざる一面を見られたようで面白かった。人を驚かすとき怖がらせて教えるより、妖怪話を例えに用いながら面白おかしく教えるほうが人の心に届きやすいのではないかと思う。民間伝承は私達が幸せに生きていく術を教えている。八雲は古くから伝わる民話を再話することで、私達日本人が忘れつつある先人の知恵に気づかせ思い出させてくれている。

〈佳作〉

人の世の美しさと哀しさ

—小泉八雲作

「青柳ものがたり」を読んで—

広島県尾道市 榎 勝 博

人は美しいもの憧れ、そこから導き出される人道的な善の行為に安堵する。しかし、花が咲き、やがて枯れるように美しさは永遠ではない。人は美しさの中に哀しさが包まれていることを知り、人生の真実を理解する。

青柳ものがたりの主人公友忠は「文武両道の達人」となったとあるが、「容姿がはなはだ端麗だった」とも。友忠が雪の中の旅で難儀し、一夜の宿を借りた翁媪の娘青柳もまた「顔かたちのはなはだ美しい」女性であった。青柳の「立ち居」は「いかにもみやび」であり、「娘のことは、その顔と同じように美しいのである」。

美しい者は美しい者に共感する。友忠は「胸のうちにわき起こった喜びに動かされたまま、にわかに一首の和歌を詠んで、娘に問いかけた」。和歌の贈答はお互いが和歌に深く通じていなければ難しい。「娘は言下に、なんのためらいもなく、すらすらと次のような返歌をよんだ」のだから、相当の教養があつたのだらう。人の美しさは、それを支える中身がなくてはならない。それは教養で磨かれた美しい心であらう。

友忠の心のうちには、「神がなんじの身に授けてくれた、この幸運をつかめ」という声が叫ぶ。友忠は「いきなり翁媪に請うて、どうか娘ごを自分の嫁女にくだされい」というが、それほどには「切なるものがあつた」のだ。人は恋をするとこのように一途になり、自分の立場さえ軽んじてしまいがち。しかし友忠の偉さは、そういう時にあつても感情に溺れることなく冷静に自らの姓名、身分を名乗り礼儀正しい対応をしていることだ。

翁の友忠に対する言葉。「娘はこのとおり、山家そだちのおろかも。なんの躰けや学問のあるではなし、とてもとても、お武家様の嫁女には不向きでござります」というが、すぐに返歌を詠める教養は翁媪から学んだはずである。したがって、翁の教養がこうした謙虚な言葉をもたらし、また、友忠の教養や人柄を見抜いて娘を託すことに躊躇いはなかつたのであらう。友忠の差し出す小判の包みを受けとらないこともまた、物欲に目がくらむことのない翁の人格の高さを物語っている。自らの高齢を自覚し、娘の行く末が心配だつた翁は友忠の出現を喜んでいただらう。友忠に対する、「きつと娘にやさしくしてくださいださることは知れておりますから」という言葉は確信である。

京都での用務を果たそうとする友忠が青柳のことを心配するのは当然である。「細川侯はまだ若年で、かつ、漁色の癖があつた」が故に友忠は命を賭けた決心をしなければならなかつた。駆け落ちである。友忠は漢詩の形で青柳に「おのれの深い思慕の情をのべ、お

のれの失意の苦衷を、それとなく通わせ」る。読者は細川侯がその立場を利用して、青柳を我がものにしようとするのではないかとハラハラする。しかし、細川侯は友忠の真情にふれ、自らの欲望を剥き出しにすることはなかった。「やさしい涙が光っていた」細川侯の手厚い配慮で友忠は青柳と夫婦になる。しかし、幸せな歲月は五年で終わる。死を悟った青柳は自らの魂は、「木の魂、心は木の心」だと告げる。「柳の生がわたくしの命」なのだ。

柳の精霊が人間となつて思う人に出会い幸せに暮らすことは、冷静に考えればあり得ない。しかし、読者はそれが虚構であると知りながら青柳の物語に感動し、あたかもそれが真実であるように思う。何故だろう。

友忠と青柳の恋は美しい。人はその美しさに感動する。そこには人と柳という境界を越えた存在として、不思議とは考えない。現に私達は子供の頃から、人と精霊の關係の物語を何の不思議も感じずに読みながら成長してきた。精霊には欲望がない。人間の美しさを喪失させるような邪心がない。

柳の精霊は無心であるが故に美しい存在となっている。そして、その美しさは柳の中にとどまらず、他の生きものたちの心を清らかにし、友忠の心は細川侯の心を清らかにした。

青柳を失った友忠は人の世の無常を知り、また、「お念仏を唱えてくださいまし」と言った青柳の言葉を胸に「剃髪して仏門に入り、一介の雲水」となる。諸国を遍歴する中で訪ねた青柳の生家は跡形もない。ただ、柳の切り株が三株残っていた。雲水の友忠はす

べてを受け入れ、経文を刻んだ碑を立てた。

この物語の最後の様子は、人の世は美しさや哀しさを超えて「祈り」に達するのだと私達を論しているように思う。

講評

感想文一般の部は応募数が前年度からほぼ半減したが、熱のもつた力作が目立ち、3点に絞るのに非常に頭を悩ませた。

ただ「衝立の乙女」を取り上げた優秀賞の感想文は、副題の通り「名づけることの意味」で論旨が明解に展開され、頭一つ抜けていた。筆者はスイスの言語学者、ソシユールの思想から、名づけることで人は初めて「もの」の存在を認識すると指摘し、衝立に描かれた少女の絵に名前を付け呼びかけ続けた篤敬の行為が少女に人格を与え、顕在化させたとした。「幸福を願って名づけた思い」を口に出し、世界の人々と共有することの大切さをハーンは教えているという筆者の感想は、混迷の時代だからこそ強く胸に響いた。

(講評者 佐々本浩材)

詩

〈優秀賞〉

ゴブリンたち

沖縄県那覇市 あざとよしや

紺地の空

飛雁の旋回

石灯籠と萩の庭

古井戸から

次々這い出る

ゴブリンたちを

一昨日丸善で買った

舶来の青黒インキで素描

柄杓をくれと 船幽霊

遠き母の写身 雪女

影の如くつきまとう 平家蟹

奇妙な

異彩の蛾と

鞠やか黒猫が

船の舳先に立てる

西欧詩人の見た夢と

いにしえの日本の幻影を

藁紙ノートブックに素描

首がぼとり 古椿

ケタケタ啜う 轆轤首

目の前に二つの姿あらはすは 離魂病

紺地の空

飛雁の旋回

石灯籠と萩の庭

古井戸から這い出た

恐ろしいゴブリンたちよ

いまでは

セピアがかった

墨色のゴブリンたちよ

彼の愛したゴブリンたちよ

〈優良賞〉

わたしのこと

埼玉県さいたま市
くるみ

わたしはあなたの耳から

いとも簡単にすべり込み

まだ何も知らない舌の根を

むんずりと見上げながら

泣きも喚きも笑いもせず

あなたの腹に落ちるのです

忠五郎も巳之吉も芳一も

わたしを腹の中で飼っておりました

わたしはあなたの腹に

日々粛々と種を撒き

純真と良心をえさにして

芽を出し茎を伸ばし葉をつけて

ほうら、言っておしまいなさいと

あなたに語りかけるのです

忠五郎も巳之吉も芳一も

わたしを腹の中で飼っておりました

わたしはあなたの内側で

夜な夜な蕾を膨らませ

腹を破らんとばかりに肥えたころ

極彩色の花を咲かせるのです

あなたはわたしを吐き出すでしょう

唇に鮮血と花粉をつけながら

ごらんなさい

あれほど駄目と言ったのに

あの人の唇にも私の足跡が

忠五郎も巳之吉も芳一も

わたしを腹の中で飼っておけませんでした

ひみつは美しい

いのちを投げ出してしまえるほど

わたしは美しい

〈佳作〉

不揃いのティーカップ

島根県大田市 山形 淑華

不揃いのティーカップ。私の家にもありました。お誕生日会を勝手に。妹が「うちでお誕生日会をするから来て」と当日、お友達を呼んだのです。母は大慌て。たまたま、お誕生日に買ったホールのケーキを分けて、お皿に盛って。お菓子をお皿に盛って。そして、紅茶をカップに注いで。多分、ティーセットを母は用意してくれて立派なお誕生日会を開いてくれたんだけど。私の頭には、ティーカップが、ちぐはぐになって残っていたのです。青い小さなティーカップ。灰色の町の描かれた大きなティーカップ。とにかく、不揃いだったのです。パタパタスリップパが、大きな来客用のスリップパが、子供達の足には鳴って。大きな大人用のテーブルと椅子にお洒落した子供達がついて。お母さんは、よそいきのエプロンをしてお誕生日会を見守ってくれました。今でもあります。不揃いのティーカップ。茶渋がついて、戸棚の奥に眠っているけど。妖怪が出てきそうですよ。たまに、じつと、戸棚の奥を覗いています。使ってみようかな。底に顔が浮かんできたら怖いけど、大切な、大切な、記憶と声が燃え上がる。深夜二時。死んだ者の蘇る時間。きつと、お誕生日会に、呼

ばれた者が居たのでしょうかね。ちぐはぐでしたから。後から考えると、笑い出してしまう、しんみりしてしまう。私は、隅っこ
の大きなママの椅子に座って、食卓の端っこから、食器の縁を
みていた。いろいろな大きな影が、のびたり、ちぢんだりして
いて、特に、ケーキのろうそくが灯された時は、炎が揺揺と大き
く見えた。赤ん坊の泣き声も聞こえた。ふとふき消された
火で、はっと消えた何か。があった。訪れた者が居たんだ。パチ
パチお目目をとじたりひらいたり、まばたきしてしまつた。ね
むくなつちやつてね。ケーキは無事に分けられて。断面がキリッ
となつていて美しかった。はしゃいで、わくわくして、夢を
みていた気がしたよ。天国からの手紙かな。突然、思い出しまし
た。絆が、生まれたのかもしれないね。小さいから。何でも一生
懸命で。鼻の頭がぶつかりそうなくらいのテーブルといすにつ
いて、一生懸命お祝いをしたんだ。ぎゅつとにぎりしめていた手
が、忘れられない何かを思い出させてくれた。よ。

講評

募点数は昨年に比べてやや少なかったものの八雲作品を良く読
み込んだ作品が多かった印象である。ただ、詩作品として成立さ
せるには作者自身の詩的な世界観が表現されなければならず、そ
こに届いたかどうかが評価の基準となった。

優秀賞の「ゴブリンたち」は、ヨーロッパ世界の妖精・ゴブリンを効果的に登場させて、八雲の捉えたであろう「日本の幻影」をその時代の空気感と併せて醸し出している。

優良賞の「わたしのこと」は、八雲作品の登場人物を巧みに取り出して語らせる発想が面白い。ただ、題を工夫してはどうか。

佳作の「不揃いのティーカップ」は、ギリギリ散文詩として成立しているが、言葉の整理が必要。ただ、独特のリズム感が好感である。

（講評者 川辺 真）

【審査員】

稲田 忠徳	内田 融	川辺 真
小林久美子	佐々本浩材	佐藤 淳
高嶋 敏展	西村 勝美	

（五十音順）

表紙写真

松江時代の小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)
1891(明治24)年 小泉家蔵

令和4年度

**「小泉八雲をよむ」
感想文・詩 入賞作品集**

令和5年3月

編集・発行 松江市教育委員会
八雲会